

サポクラ 通信

令和4年(2022年)12月号

今月の内容は...

- ・冬のヒツジについて1
- ・アジアゾウの妊娠5
- ・2022年もいろいろありました8
- ・飼育4班11

冬のヒツジについて

初めまして、こども動物園のヒツジを担当している
仲野といいます。

今年4月から円山動物園にて飼育員として働き始めまし
た！

北海道に来るのも初めてで初体験の寒さと
日々格闘しています



今回は冬の間のヒツジの様子をご紹介します！

☆冬の間の飼育について

ヒツジは冬の寒さの中でもへっちゃら！
いつもと変わらずに外に出てエサの乾草を
モリモリ食べています。
どうしてこんな寒さの中でも元気に
過ごせるのでしょうか？



寒さなんて気にしない！

その秘密はヒツジの毛皮にあります！

ヒツジの毛皮は、中で細かい繊維が縮れて絡みあい複雑な構造を作ることによって空気を逃がしにくくし、保温効果を発揮しています。

ヒツジの体温は、約39℃と人より高く、毛皮にこの機能があることから、体温が保たれ寒い環境でも生活することができるんです！

このヒツジの毛皮は私たち人間の洋服などにも利用されていますね。

☆室内飼育について

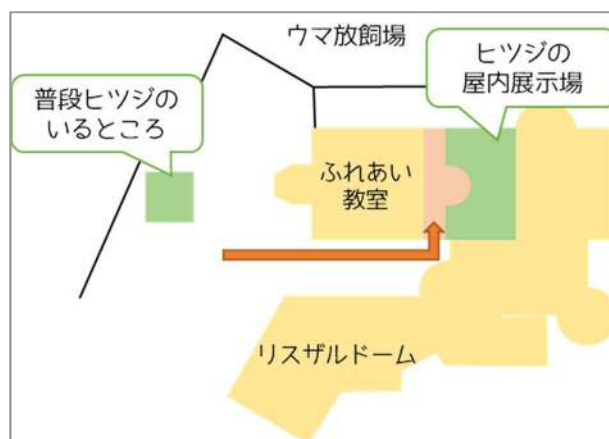
ヒツジは寒さには強い動物です。
ですが、雨や雪の量が多いときは、
ヒツジの毛が濡れてしまい、風邪をひくなど
体調を崩してしまう可能性があります。
そんな時は、いつもより早く屋内へ
収容しています。



屋内の様子

ヒツジは、開園時間中は基本的には外で生活しているので、
暖かい屋内でのんびり過ごしているヒツジの姿を見ることができるのはレア！
ちょっとしたステージのような場所があり、そこは普段よりヒツジに近づくことが
できます。

もし、開園中にヒツジ達の姿が
見えなかったら、ふれあい教室横の道を
奥まで進んでみてください！



ヒツジ屋内展示場の場所

☆ヒツジ見分け方

さて、ここまで冬場のヒツジ達の様子をお伝えしましたが、最後に円山動物園で飼育しているヒツジ達の見分け方を伝授します！！
皆さんはヒツジの見分け方のコツは知っていますか？
1頭1頭、顔が違うのはもちろんですが
ヒツジの耳に注目してください。
耳に**赤い**タグが付いていませんか？



赤い耳標がついています

これは耳標といってヒツジの個体識別するためについているものです。

このタグの番号がわかれば一発でどの個体かわかります！

ぜひヒツジ達の耳に注目して観察してみてください！！

☆ヒツジ紹介

・サクラ

頭と前髪の毛がペタンとつぶれているのと

左目の下にあるホクロがチャームポイント♡

耳標の番号は 21 番。

ヒツジ達のリーダー的存在で外に出たり

中に戻って来る時も

最初に進んで行く頼れるヒツジ！



・ナギ

サクラと一緒に頭周りの毛が潰れているけど

サクラと違ってナギにはホクロがありません。

耳標の番号は 22 番。

4頭のヒツジ達の中で1番、臆病で警戒心が強いんです

この写真を撮るのにもかなり苦戦しました。

でも、4頭の中では1番落ち着いていて

おしとやかなヒツジ♡

・クルミ

頭周りの毛が多く盛り上がっているのが特徴。
耳標の番号は23番。4頭の中で1番元気！
活発に動いているヒツジがいたらそれはきっと
クルミです。
だけど触られるのは少し苦手。クルミが近くを
通った時に優しく触ってみてね



・マツコ

頭のとっぺんの毛が無いのが特徴のヒツジ。
耳標はマツコだけありません。
耳標がないヒツジがいたらそれがマツコです。
4頭の中で1番の食いしん坊。
エサの入ったコンテナを見つけて鳴いている
ヒツジがいたらそれは間違いなくマツコです。

個性豊かなヒツジ。ぜひ、お気に入りのヒツジを見つけてみてください！！

アジアゾウの妊娠



サポートクラブのみなさま、いつもご支援いただきましてありがとうございます。アジアゾウ担当の小林です。

今回はアジアゾウの妊娠についてお話したいと思います！

すでにご存じの方も多いと思いますが、当園のアジアゾウ・パール(メス 19 才)が妊娠していることが判明しました。早ければ 2023 年 3 月、遅くとも 2024 年 1 月には出産予定です。



パール(左)とシーシュ(右)

難しいゾウの繁殖

日本に初めてアジアゾウがやってきたのは室町時代です。その後、江戸時代までに 7 回来た記録がありますが、当時は動物園がなく、渡来したゾウは短期間で帰国するか、簡易な飼育施設で過ごしていました。本格的なゾウ飼育が始まったのは、1888 年(明治 21 年)に上野動物園に来園した雌雄 2 頭です。それから今日までの 134 年間で、アジアゾウの出産例はわずか 15 例しかありません(死産含めず)。しかも 2000 年代に入るまでアジアゾウの繁殖は成功しませんでした。

成功しなかった原因は様々ありますが、野生の生息環境を提供できていなかったことが大きく、例えば、ゾウは群れで出産・子育てをする動物ですが、そもそも群れ飼育をしていなかったこと、気性が荒く、扱いにくいオスの飼育が敬遠され、メスだけの動物園が多かったこと、相性が合わないペアでも動物園間でゾウを入れ替えなかったことなどがあげられます。

その後、様々な取り組みや技術の確立が進み、ようやく 2004 年以降少しずつ繁殖が成功するようになり、直近では 2020 年 10 月に東京都恩賜上野動物園、今年 6 月に名古屋市東山動植物園で繁殖に成功しています。

このようにアジアゾウの繁殖はとても難しいのが現状です。



天気の良い日は短時間でも屋外で日光浴をします



妊娠しているパール

長い妊娠期間

ゾウの妊娠期間は哺乳類の中で最も長く、約 22 カ月もあり、子育てを含めると 4～5 年に一度しか出産できない動物です。一生の間に 5～6 回しか出産しないゾウが、少しでも多く出産できる環境づくりに取り組むことは動物園の使命です。



妊娠に至るまで

メスゾウの発情周期は血中プロゲステロン(黄体ホルモン)を計測して把握することができます。ゾウの発情周期は約 3～4 カ月です。発情に合わせてプロゲステロンの数値が上下しますが、妊娠している場合は高い数値を維持し続けます。

パールは神経質な性格なため、なかなか安定して採血をすることができませんでしたが、2022 年 4 月から 2 週間毎に安定して採血ができるようになり、プロゲステロンを計測すると非常に高い数値を維持していました。

その後、6 カ月間数値が下がらないことからパールの妊娠の可能性が高まり、10 月に腹部エコー検査により胎仔を確認することができ、妊娠確定に至りました。



耳裏の血管から採血をします



腹部エコー検査の様子

出産に備えて

今後は専門家のアラン氏に助言をいただきながら、仔ゾウ用のトレーニングエリアや体重計、仔ゾウの逸走対策など、ゾウ舎の改修工事も行います。

また、授乳しなかった場合に備えて仔ゾウ用ミルクの準備や、投薬などの準備も進めていきます。

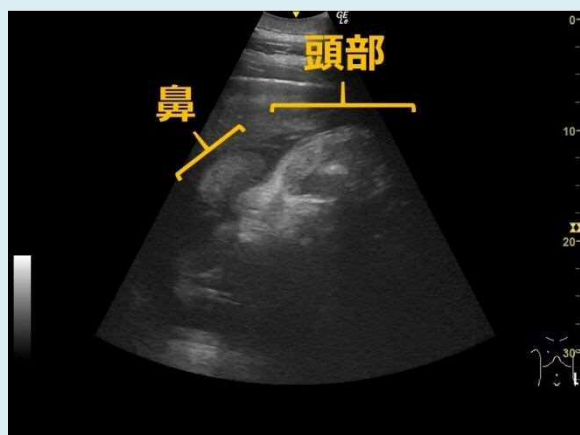
さらに、直近に出産例があった上野動物園と東山動植物園を中心に、海外の動物園を含め、他園館からヒアリングを行い、準備を進めています。



アラン氏から改修について助言をいただく



後肢にチェーンを装着する練習



エコー画像(10月6日撮影)

万が一難産などになった場合、チェーンで四つ足を係留(繋ぎとめること)して立位鎮静が必要になる可能性があります。安全な状態で飼育員が出産や育児をサポートできるように、現在チェーンをつけることに慣れてもらう練習をしています。



現在は毎週エコー検査で胎仔の状態を確認しています。検査中のパールはとても落ち着いており、胎仔も元気に動いている様子がみられます。

※エコー検査の動画は公式 Twitter にもアップしました。

(2022年12月7日)

パールが無事に出産を迎えられるよう、あたたかく見守っていただけたらと思います。

2022年もいろいろありました

円山動物園サポートクラブの皆様、こんにちは。

2022年最後となる3班からのお便りでは、ボルネオオランウータンのレイト(もうすぐ3才)の様子や新獣舎の情報、また、シロテテナガザルの仔ローラについてお伝えしたいと思います。

ボルネオオランウータンのレンボーとレイトは旧「類人猿館」から仮住まいに引っ越して来て1年半が経ちました。彼らの最近の様子と建築中の新獣舎の情報を合わせてお届けします。

また、人工哺育を経て家族のもとへ戻ったローラは復帰して1年が経過しましたが、復帰後の“いろいろ”を少しふり返ります。

レイトたちのこの頃

レンボーとレイトが仮住まいの動物病院に引っ越してからはや1年半。

レイト、元気です。



環境にも慣れて・・・どころか、
近頃はやんちゃになってきました。

お母さんのレンボーをまねて、巣を作っ
ての食事です。

動きも早くなって、レンボーより先に食
べたいものを採るように。

年が明ければ、3才。

体もグッと大きくなってきて、いろいろ
なことを自分でチャレンジするようになっ
てきました。



その中で一番の変化は、日々の健康診断を
自ら行うようになってきたところでは
す。1歳ころから自我がはっきりと芽生
えて中断していた体温測定や聴診も、
最近は自ら進んで行うように。採尿も
もう一息です。



レイトの成長は母レンボーあってこそ。

オランウータンの仔育ては母親がつきっきりで7、8才まで行います。私たちヒトの次に長い育児期間だと言われます。

レンボーがレイトを愛情深く、示唆的に、時に厳しく育てる姿を間近で見させてもらって、感動しながら学ぶ日々です。



やんちゃであって、甘えん坊。

まだまだお乳も大好きな様子。

新しい獣舎への移動は2023年末頃ですが、レンボーもレイトも元気に過ごして皆さまと再会できる日を心待ちにしている、、、ハズです。

その頃にレイトは4才を迎えますが、一番活発に動く時期となるため、広くなった新しい獣舎で縦横無尽に動き回る姿をご覧いただけたと思います。

どうぞお楽しみに。

一方、新獣舎は・・・

まず、壊して・・・(2月)



基礎がためして・・・(7月)



屋根をのせる壁の立ち上げ・・・(12月)



年明け2月には屋根がかかります。

期待と緊張が入りまじり・・・もう少し。

ローラのいろいろ

2021年7月4日に生まれたローラ(♀)は母ラーチャの5番目の仔です。ラーチャが必死に育てようとしたのですが、衰弱が著しく生後11日齢から約5か月間、親から離れて人工哺育で育ちました。



ローラを抱く父コタローとそれを見守るラーチャ

その後は健康状態も安定し、母親はもちろん抱きますが子育てには参加しないと言われる父親もローラを抱っこするなど、良好な関係が継続して観察されました。

しかし、日々生きることの勉強です。

5月にはローラが手を滑らせ、高さ3.5Mの高さからチップの上に落下したこともありましたが、そういった不慮の事故に備えて弾力性のある床材にしていたとはいえ、ケガもなく本当によかったです。一度落ちたことで慎重さを学び、その後は木などから落ちるようなことはなくなりました。

両親のもとへ戻り、シロテテナガザルとして生きることを学んでいるローラ。

9月いっぱい離乳もすみ、元気に成長しています。

(了)

人工哺育をしている間は毎日両親と檻越しで面会をすることで家族の絆を繋ぐことに取り組みました。

そうしながら、ローラが固形物を自分で食べられ、かつ檻越しに飼育員が授乳できるようになった昨年12月8日、生後157日齢で両親のもとに戻ったのでした。

両親のもとに戻ることは、ローラにとって命がけのことでした。

それは、家族の絆が強いシロテテナガザルでは一旦群れを離れたものを受け入れるのに高いハードルがあるからです。

さらにそれをクリアした後には、新たな環境にローラが慣れていく必要があります。

実は、ローラは戻った7日後から下痢が始まり、授乳量が半分になったことがありました。環境に適應し、両親と共に過ごすために必死に頑張っていたのだと思います。結果的に1週間後には回復しました。

円山動物園を応援してくださる皆様へ

2022年も当園へのご理解とご協力、また多大なるご支援を賜りましたことに心より感謝申し上げます。

2023年もどうぞよろしくお願いいたします。みなさま、良いお年を。

(李)

🐺 飼育4班 🐺

円山動物園サポートクラブのみなさま、いつもご支援ありがとうございます。
チンパンジーとヒグマ、そして12月より再びシンリンオオカミも担当になりました、高岡です。
今回は12月12日に来園したシンリンオオカミ2頭と、来園の経緯についてご紹介します。

「シンリンオオカミの飼育を一時断念」

円山動物園が2019年に策定した札幌市円山動物園基本方針「ビジョン2050」では今後飼育展示していく動物種の考え方について整理しており、良好な動物福祉を確保できるか、また継続して飼育していくことができるか等の観点からシンリンオオカミはやむを得ず飼育を断念する種としていました。2022年5月号のサポートクラブ通信では当時飼育していたシンリンオオカミ「ジェイ」(オス、当時17歳)の療養生活や最期についてお伝えしましたが、当初はジェイをもって円山でのオオカミの飼育展示は終了の予定となっていました。

円山動物園がオオカミを継続して飼育していくことが難しいと判断した理由として、飼育スペースの問題が挙げられます。オオカミ舎の屋外放飼場はとても広いですが、サブの放飼場、さらに寝室はあまり広くありません。オオカミは生態上、大人になると自立心が芽生え、群れを離れて繁殖相手を探し、そこで新たな自分の群れをつくります。ところが飼育下ではスペースが限られているため、自ら群れを離れることができません。それどころか、オスの場合は自らの父親に闘いを挑むこともあります。その場合、どうしても群れを分けて飼育する必要がありますが、広い放飼場で暮らす群れの一方、満身に運動ができない放飼場で長い時間を過ごさなければいけない群れができてしまいます。将来的に元気よく走り回って運動することができなくなる個体がでてきてしまうと考え、当園での繁殖及び飼育はやむなく断念することになりました。



父親と群れを分けることになった「ユウキ」(2015年にとくしま動物園に移動、写真左)と「ショウ」(写真右)は、しばらく1頭で暮らした後、他園に移動しました。

「展示復活、シンリンオオカミ」

ジェイが死亡する約一週間前、ジェイの息子である「ショウ」(オス、11歳)が、移動先の鹿児島市平川動物公園で繁殖し、5頭の子どもが生まれたという嬉しい知らせがありました。「ショウ」は繁殖のために円山から貸し出している契約になっており、現在も帰属は円山動物園にあります。動物園では、他園の帰属の個体との間に生まれた産子の帰属は、相談して決定することになっています。今回は第1子が平川動物公園、第2子が円山動物園・・・と決定し、当園帰属のオオカミは第2子および第4子である「ジュリ」と「カエデ」となりました。園の帰属になれば必ずその園で飼育しなければならない決まりではありませんが、メス2頭の飼育であれば群れとしての飼育もでき、動物福祉を確保しながらの飼育が可能と考えました。また、平川動物公園でも5頭のオオカミたちが大人になるころには飼育スペースが不足する可能性があることから、今回の2頭の来園が決まりました。

「鹿児島から北海道へ」

2頭の来園は約2か月前に確定し、移動日が12月12日に決まりました。昨年の根雪になった日がこの直後だったため、わずかな可能性を信じましたが当日は雪が積もり気温も低くなってしまいました。同日の鹿児島市の気温は最高17℃、札幌市は0℃でした。寒さに強いオオカミとはいえ、まだ8か月齢のため寒暖差が心配でしたが、2頭は早朝に平川動物公園を出発し、飛行機を乗り継ぎ、空港から動物園までの輸送車内ではとても静かに、ぐっすりと眠っていたようです。円山動物園に到着したのは17時半頃、放飼場にライトを取り付けて他の班の職員にも協力してもらい搬入作業を行いました。



搬入作業の様子。箱とオオカミの重さは合計約100kgありました。

念のため寝室には暖房を入れ、パネルヒーターも設置して室温を8～10℃程度にしました。1頭ずつ順番に箱を開けると、床や壁の匂いを嗅ぎながらゆっくりと落ち着いて入ってくれました。寝室に収容後すぐに2頭を会わせると、長い輸送の疲れや知らない場所での不安からか、鼻を鳴らしたり、震えたりする様子が見られました。その後は少し落ち着き、餌を見せるとすぐに少し食べてくれました。



慎重ながらもすんなり寝室に入ってきた「ジュリ」(写真左)と「カエデ」(写真右)。

翌日にはサブ放飼場、その翌日にはメイン放飼場での展示練習を行いました。もともと好奇心旺盛な2頭は複数の職員が見に来て、警戒したり怯えたりする素振りほとんどなく初めての雪遊びを楽しんでいた様子でした。来園3日目である14日からは夜間も雪山の上で眠り(最低気温-6℃)、翌15日からは一般公開も始まり、朝から元気に走り回る姿を見せてくれました。



雪が積もったメイン放飼場で走り回る「ジュリ」と「カエデ」。



2頭ならんで山の上で眠りにつきました。

まだまだ成長期のオオカミ2頭が活発に動きまわる様子や、オオカミならではの個体間のコミュニケーションはじっくり観察してみるとおもしろい発見がたくさんあります。また、北海道にオオカミがいた歴史を知るきっかけとして、エゾシカ・オオカミ舎にぜひ足をお運びください。